



アリス・ミリア

東京2020大会を見据えて

第2回 女だけのオリンピック

ー アリス・ミリアと国際女子スポーツ連盟

田中 ひかる



第2回世界女性競技大会 開会式(1926年イエテポリ)



第2回世界女性競技大会 1000m走(1926年イエテポリ)

近代オリンピックの創始者ビ
エール・ド・クーベルタンとI
OC(国際オリンピック委員会)
は、女性のオリンピックへの参
加を拒み続けたが、女性アス
リートたちは粘り強く門戸をこ
じ開けていった。

一八九六年の第一回アテネ大
会は「女人禁制」だったが、第二
回パリ大会には一二人、第三回
セントルイス大会には八人、第
四回ロンドン大会には四三人の
女性が参加している。しかし、
参加を許されても非公式種目で
あったり、公式種目であっても

メダルの代わりに賞状しかも
えなかったりした。

こうした状況に対して立ち上
がったのがフランスのフェミニ
スト、アリス・ミリアである。
彼女は一九一七年に「フランス
女子スポーツ連盟」を設立。こ
れに呼応するように欧米各国で
女子スポーツ団体が組織されて
いった。

彼女たちはIOCに対し、陸
上競技に女性を参加させるよう
働きかけたが、彼らは「聖域」
であるトラックやフィールドに
女性が進出することを断固拒

んだ。それでも彼女たちは走る
ことや跳ぶこと、競い合うこと
を諦めなかった。一九二一年に
は「国際女子スポーツ連盟」を
組織し、続いてパリで「世界(万
国)女子オリンピック大会」を
開催するに至る。

IOCが「オリンピック」と
いう用語の使用を認めなかった
ため、「世界(万国)女性競技大
会(Women's World Games)」
と名称こそ変更せざる得なかつ
たが、大会自体は数万人の観客
を動員することに成功した。

その後も四年ごとに、イエテ
ポリ(ヨーテポリ)、プラハ、ロ
ンドンで開催し、会を重ねるた
びに参加国、参加選手を増やし
ていった。

もはやIOCも女性の陸上競
技への参加を拒み続けることが
難しくなり、一九三六年に既存
の男子スポーツ団体である「国
際陸上競技連盟」が管理するこ
とを条件に参加を認めた。その
結果、「国際女子スポーツ連盟」
は存在意義を失い消滅したが、
同連盟が女子スポーツの発展に
果たした役割は大きい。